

# 第 22 回いけだ夢燈花 命のストーリー 2<sup>nd</sup> September 2023



主 催：第 22 回いけだ夢燈花実行委員会  
主催事務局：特定非営利活動法人北摂こども文化協会

子供の幸せについて考える出来事がありました。今年のはじめ、知り合いの小学生の男の子が、突然亡くなったのです。なんの病気かは聞いていませんが、ご両親は心の整理がつかない様子で涙が出るほど気の毒でした。ひと月前はあんなに元気だったのに。幼い笑顔がとても可愛い男の子。あの子がなんの前触れもなく突然天国に行ってしまいました。驚きと悲しみで胸が苦しくなりました。

うちの子は小学 1 年生です。その知らせを聞いた夜、夫と一緒に話をしました。信じられないけれど、うちの子だって突然の病気や事故で死んでしまうことがあるかもしれない。決して他人事ではない。つい忘れてしまうけど、毎日が特別なんだということを、真剣に考えました。

忙しくてガミガミ怒ってばかりいる自分を振り返り、もう少し子供に笑顔を向けてあげよう。耳を傾け声を聞いてあげよう。子供の好きな事をたくさんやらせてあげよう。たまにはギュッと抱きしめてあげよう。そんな事を思いながら、この子の幸せを守れるよう、強い親になりたいと、強く思いました。

池田市在住 30 代女性

## 命のストーリー 我家のベイベー順也の事

私たちが必死に、丁寧に、そして楽しみながら育ててきた宝物、我が家のベイベー順也は、ある日曜日の朝、何も言わず、突然、旅立ってしまいました。前日、一人暮らしの長男が突然帰ってきたので、嫁も張り切ってしゃぶしゃぶを準備し、嫁が食べる肉がないくらい息子達はたくさん食べながら、就活や野球の話で盛り上がりました。日曜日当日は、野球の試合に行く予定でした。死因は、急性心臓死。わずか21歳の人生でした。亡くなって7年の歳月が流れましたが、未だにあの子がいなくなってしまうことが信じられません。

順也は、分娩室で私と長女、長男に見守られながら元気に誕生しました。生後6か月の時、神戸の震災に遭いました。避難した体育館で妻は、お腹を壊さないかと心配しながらペットボトルの水で粉ミルクを溶かせて飲ませました。あの震災を経験して、人生は何が起こるかわからないと肌身に感じたので、3人の子供が高校を卒業するまでは、無事を祈って、夫婦どちらかが必ず玄関先まで出て、「行ってらっしゃい！」と送り出すことを習慣にしていました。皆が成人して、そんな習慣もなくなった中、順也が寝室で独りで突然亡くなるとは想像もできませんでした。

5歳離れた順也を小さい時から可愛がっていた長女は、東京宝塚公演に出演中でしたが急遽帰宅、顔を見ただけで、舞台に穴をあけられないと通夜も葬式も出ず、泣く泣く帰りました。そのプロ意識に励まされ、私も何とか直後の仕事をキャンセルすることなく乗り切れました。

私が大好きな野球を息子二人ともやってくれて、とても幸せでした。私の大学のOB戦で、私がピッチャー、順也がキャッチャーの「親子バッテリー」を組んだ時、『50歳を超えたおっさんの球やないな』と嬉しそうにほめてくれました。その数か月後に逝去するとは、知る由もありませんでした。

「順也の命が教えてくれたこと」について、色々考え続けています。今聞かえてくるのは、『今まで、妻と私が一緒に築きあげてきたものは、まったく間違いはないから、これからも自信持って、機嫌ようがんばり！』というメッセージです。

本当に、今でも残念で、悔しくて、悔しくて仕方がありません。でも、受け入れて、前を向くしかありません。常々「人生有限。能力無限。」をモットーにしていますが、皮肉にも、本当に心底、実感しています。

限られた人生を「ノースマイル、ノーライフ！」とつぶやきながら、毎日丁寧に、精一杯、生き切りたいと思います。そして、寿命が尽きた時、天国で酒でも飲みながら、順也に面白おかしく、その後の出来事を報告したいと思っています。

宝塚市 太田 昌宏

2011年の東日本大震災の当日、26歳だった私は就職先の北海道で震度3の地震に遭いました。大した地震じゃないな、と思いながら仕事仲間とテレビを付けたところ、ふるさとの東北でかつてないほど大きな地震が来たとの報道が流れていました。

仕事が終わりと、帰宅してテレビを見ると、あの津波の映像が、まるで現実味のない信じられない光景が映っていました。

テレビでは、亡くなった人が映らないように場面を選んで放送しているようでしたが、後日、インターネットでは、わざわざ亡くなった人だけを何十人も撮影して編集した動画が出回っていました。観るのも勇気がいりましたが、私は現実を確かめたくてそれを観ました。

半壊した自宅の階段で赤ん坊を胸に抱きながら息絶えているお母さん。グチャグチャになったリビングで倒れている男性。台所に仰向けで横たわる老夫婦。全てのご遺体が、まるで眠っているような、苦しみのない安らかな顔だったことに驚き、私は泣きました。津波の恐ろしさ、水が引いたあとの想像を絶する悲惨な現実。思い出すとまた涙が出てきます。あまりにも多くの命が一瞬にして消えてしまいました。

私は震災から間もなく仕事を辞めてふるさとに帰り、結婚しました。

3年前、夫の転勤で池田にやってきました。

ある日、車のナンバープレートを見て、声をかけてきた高齢の男性がいました。「あの2011年の震災の時、俺はすぐに車で東北に向かったんだ。ボランティアで滞在したよ。もう何とか力になりたい一心で車を走らせたんだ。俺は神戸の震災も経験しているからね」

ふるさとの為に遠く大阪から応援に来てくれた方もいらっしゃったんだ、と人の優しさに触れた瞬間でした。きっと多くの方々が、自分にできる事をそれぞれの形でしてくださったのだと分かります。

西日本でもあと数年以内にとんでもなく大きな地震が来ると政府が警告しています。想像するだけで恐ろしいです。

けれども、時間はかかりましたが、復興した東北や、神戸を見てわかるように、人間の底力はすごいです。助け合う勇気と優しさがあれば、多くの命が助かるはずですよ。家族や友人、ご近所の方々が守られるよう、常日頃、防災を意識して生活していきたいなと思います。

池田市在住 30代女性

私の祖父は 32 歳という若さで太平洋戦争時のニューギニア戦線で戦死しました。当然の事ながら、遺骨もなくただ名前の書かれた紙が入った木箱が家族に渡されただけです。

昭和 50 年に日本戦没者遺骨収集の事業で、祖母はニューギニアまで行って来ました。祖母から聞いた話では、ジャングルを切り開いただけの道をバスで移動したそうですが

日が暮れて次の場所に移動する時になった時、バスが故障してしまったので新しいバスに迎えに来てもらう事になりました。その時の通信手段は無線で連絡をしていて、迎えのバスの場所まで皆で歩くことにしたそうです。

慰霊の旅でもありましたから、ロウソクなどいっぱい持っていたので銘々、懐中電灯やロウソクに火を灯して、密林の中の舗装もされていない道を歩いて行ったそうですが、その時に光る木を見たそうです。

それは蛍の木でした。蛍の木の事は読んだことがあり知っていました、一本の木に数万匹を超える蛍が集まり、そのため木が光っている。

皆はしばらくその木に見惚れていたそうです。

おそらくこの蛍の木を祖父も見たのでしょね。

とても綺麗だからも日本に残してきた家族にも見せたいと思ったのでしょね。

そして祖母はその蛍の木を見る事が出来た。

遺骨は見つかる事は不可能な事でしたが、この蛍の木はきっと祖父が祖母に向けたメッセージだったのかもしれない。

それは祖母だけでなく、はるばる日本からやって来た他のご家族に対してのメッセージでもあったのでしょね。

バスが故障したのも、それが日暮れ時だったのも偶然ではないのでしょね。

ニューギニア戦線は戦闘ではなく、飢餓と病で亡くなったと聞きます。

せめて祖父はこの蛍の木の下で、静かに眠ったと思いたいです。

今この平和な世に生きて、蛍の灯をなんの心配もなく楽しむことが出来る。

これって本当に幸せな事ですね。

池田市在住 50代 女性